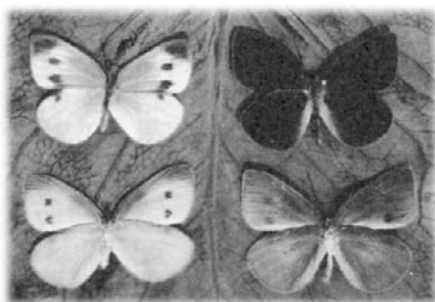


本当に身近な、誰でも知っているチョウといえ
ばアゲハチョウとモンシロチョウでしょう。これ
まで、つい専門的な話に踏み込んだりしてしま
すが、一貫して「チョウの世界の不思議」を伝え
たいというスタンスです。引き続き、モンシロ
チョウやアゲハチョウのようなごく普通種にも
意外に知られていない多くの不思議があること
を紹介していきましょう。モンシロチョウが
キャベツやダイコンなどの害虫でもあることは
みんなが知っています



ますが、本来は山地性でイヌガラシなどの野生植物を食べていたのが、人間による栽培野菜に順

応して分布を広げ北海道から南西諸島全域で見られるようになってい
ています。人間の目では♀は翅表の黒い鱗粉が濃くて白っぽい♂と容易に区別
できますが、モンシロチョウ自身は紫外線が見えていて、紫外線をよく反
射する♀は♂には明るく光って見え、逆に紫外線をよく吸収する♂は♀側
からは黒く（正確には補色の青緑色に）みえているそうです。紫外線透
過フィルター使用で撮影された



写真の右が♂で上が翅表、下が裏面です（参照1）。色覚に関する研究では紫>黄>青>赤の順に反

応が見られ、赤色にはほとんど反応しなかったそうです。赤い花にくる場合も花の芯部分が黄色であるとか、赤い色に惹かれての結果ではないと説明されています（参照2）。

モンシロチョウ♂の習性で面白いのは、他の種に対する強い排他性です。キャベツ畑などで近縁のスジグロシロチョウがモンシロチョウの群れのなかに入り込むと、気づいたモンシロチョウがすぐに追い払おうと迫り、たちまち多数の♂がいっせいに加勢して群れをなした追跡飛行が展開され、畑の外に追い出します。個体密度が高まると雌雄ともに群れをなして移動するという習性もあり、

鹿児島、三重、千葉、秋田などで記録されてい
ます（参照2）。岡本綺堂による『半七捕物帳』に「蝶合戦」という1篇（注）があ
って、万延元年（1860）6月の末、江戸の本所に白い蝶が何万匹も群が
って飛ぶという話がでてきますが、まったくのフィクションではなく、実
際の数はオーバーに表現されているでしょうが昔からこのような事象の
観察例はいくつかあるようです。

私は中学時代にモンシロチョウの羽にマジックで赤や紫などの色をつけて
飛ばし、一度危険な目にあって遠くへ飛び去っても再び同じ所に戻
ってくるという習性を確認したことがあります。より専門的な研究では
♂において定着性が高く、発生地で羽化する♀との交尾確率を高くす
るためだと結論づけています。私のマジック彩色実験では「すごく
きれいな珍しいチョウを見たよ」と何も知らない母を驚かせてしま
ったという愉快的エピソードがありますが、実際、そのときの菜の花
畑は色とりどりのモンシロチョウが飛び交ってとてもきれいでした。

ところで、モンシロチョウにかぎらず、♂に交尾を迫られた♀がお尻を高くそり上げるしぐさをするのを目にしますが、これが「ハイ、どうぞ」というOKのサインだと思う方、間違いです。チョウの♀は多くが貞節で二度以上の交尾を拒否するようで、その際、上記挙動をみせるのです。この体勢をとられるといくら頑張っても交尾はできず、♂はしぶしぶ退散となります。

通常、キャベツやハナキャベツで育った幼虫はその葉裏などで緑色蛹となりますが、越冬する場合、食草から離れてスズメなどに見つからないような場所でうすい褐色の蛹となります。いずれの場合も蛹の付着背景にあわせた保護色を実現しているわけで、どういうからくりで蛹の色を決めているのか、アゲハチョウの項ですごい研究例を紹介します。

参照1：小原嘉明著「モンシロチョウ」（中公新書、1689、p.39）←一読の価値があります

参照2：福田晴夫他著原色日本蝶類生態図鑑（I）（保育社、1982、p.185）

注）http://www.aozora.gr.jp/cards/000082/files/1021_14998.html